

写真 1 垂直型解説板 野幌森林公園

写真 2 木橋歩道 野幌森林公園



自然歩道

俵 浩 三

現代の社会では「道路」という言葉は「自動車道」と同じ意味をもっている。建設省をはじめ各地方自治体では「道路局」や「道路課」をもっているが、ここで扱われる道路は事実上すべてが自動車道であり、歩道のことほとんど意識されていない。歩道が考えられるのはせいぜい車道に付帯した歩行者空間であり、歩道それ自体が独立した形で問題とされることは、まずないといつてよい。歩道は行政の対象としては林業、観光、自然保護、都市計画などの中に細々と生き続けているだけである。

しかし「シルクロード」や「東海道五十三次」「奥の細道」の歴史をふりかえるまでもなく、交通の手段にとって歩くことは、長い年月のあいだ最も基本的なことであった。現代の生活の中で歩くことの意義はもっと見直され、復権されても良いと思われる。とくに自然と人間との接触、コミュニケーションという点から考えれば、歩道は自動車道ではとうてい体験できないような、きめ細かい味わいを与えてくれるので

ある。ここでは自然保護と関係の深い、自然探勝路と長距離歩道について記してみたい。

自然探勝路

自然探勝路は自然研究路ともいわれ、自然風景地の歩道を歩きながら路傍の植物の名前や特徴、目につき易い鳥や動物の生態、あるいは風景の生い立ちや自然の仕組み、さらにはその地区の歴史的特徴などを、興味ぶかく身近かに、具体的に理解できるように、歩道の要所に解説標識を配した、野外教育的な道路のことである。自然探勝路はいわば生きた野外博物館である。このような道路はアメリカの国立公園や国有林では Nature Trail あるいは Self Guiding Trail と呼ばれ、きわめてよく整備されている(写真)。

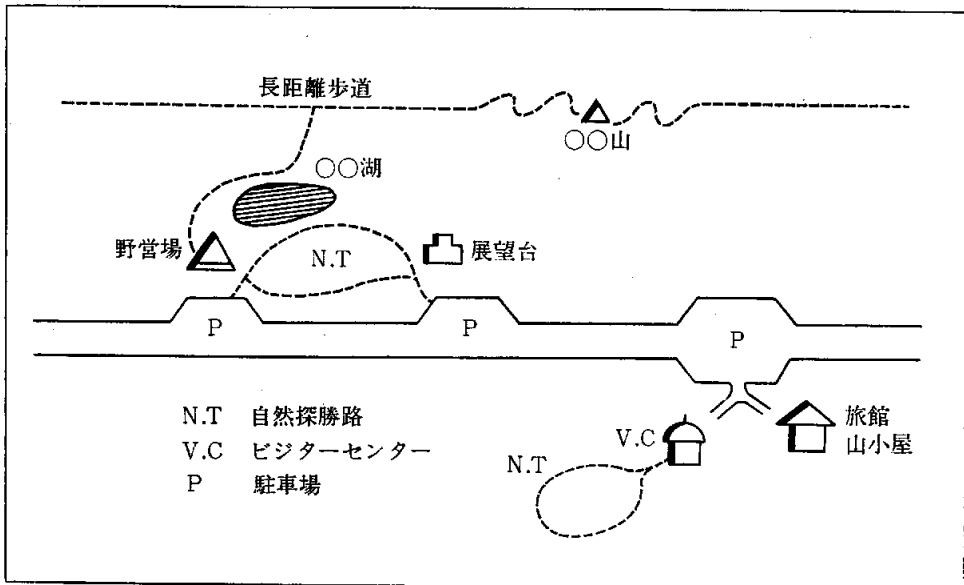
日本の国立公園などでも十年あまり前から少しずつ整備されるようになったが、その効果はまだ十分に発揮されるにはいたっていない。それは一つには自然探勝路そのものの絶対数が少なく、かつ作り方、解説方法が未熟であり、また一面では公園利用者が、この種のものに積極的な知的好奇心を示さないからである。

路線の選定

自然探勝路はどこにでも設定することができるが、なるべくはその地域の風景的な特色を代表する地形、植物、動物などを身近に観察できるところ、しかもそのコースを歩くこと自体が楽しいレクリエーションとなるような場所を選ぶことが望ましい。

また自然探勝路はその性格からいって、家族づれでも気軽に利用できるように、旅館、山小屋、展望休憩所などからなるべく近く、その長さは一〜二回程度、せいぜい三十分くらいで歩ける距離が適当である。あまり長くなると疲れたり、あきたりするし、また、あまり短くても十分な満足を与えられなくなる。路線はなるべく廻遊、ループ式のものとし、

図1 自然探勝路配置図

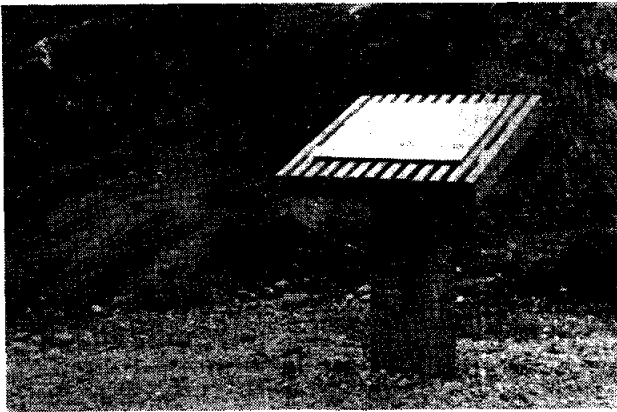


同じコースを往復しないで、出発点から一巡して再び同じところへ戻ってくるようになっていての方が良い(図1)。

写真 3 自然探勝路 オリニッピック国立公園



写真 4 傾斜型解説板 アラスカ国有林



路面は二人の人がゆっくり並んで歩ける程度の散策路、山道であれば良く、あまり土木工学的な土工量を大きくする必要はない。場合によっては一五度くらいの急勾配や階段の部分があってもさしつかえなく、湿地など歩きにくいところは木道などで補う(写真2)。しかし、これらの場合はゴミ掃除などの車が入れないと不便を感じることもあるので、そのへんはあらかじめ考慮する必要がある。

路線の選定では土木工学的配慮よりも、むしろ風景を美しく見せるような造園的配慮の方が大切である。たとえば図2・サイモンズ・ランドスケープ・アーキテクチュアから引用)のとおり、同じ歩道でも地形や植生を有効に活用することによって、木立ちの間から向う側をちらりと見せたり、扇型に風景を拡げて見せたり、見える対象を転換させた

りうっそうとした樹林の中に人を集めて外部風景と遮断したり、明けっぴろげに大展望を楽しめるようにしたりするなど、いろいろと劇的な効果を高めることができる。

また風景の奥ゆきを強調するためには、前景、中景、遠景が適度に視野に納まるような立地を選ぶことも大切である。したがって自然探勝路では、土木工学的な最短距離や直線道路にはこだわらなければならないのである。

解説の方法

自然探勝路では路線の選定にもまして大切なのは解説の方法である。自然探勝路の解説は路傍で見聞できる植物や鳥獣の名前と特徴、展望で

きる山の名から地学的なポイントまで、かなり広範囲にとりあげることができるが、そのすべてを解説することが必ずしも良いとは限らない。むしろ一本の歩道を歩くと一貫したストーリーが理解できるように配慮されている方が効果的である。たとえば火山と植物との関係、土地の水分や陽光と植物の関係、植物群落の移り変わり、有用植物と人間生活、など多様なものが考えられるが、野生鳥獣を主な対象とした場合は解説板によるシステムでは自から限界があり、指導者が同行して臨機応変な解説を行うことによって、いっそう効果が高められる。

自然探勝路の解説は、一般の博物館などの解説とくらべると野外にあるため、解説板などが風雪に耐えるものでなければならず、特定の解説対象が展示資料にくらべて見分けに

くい、などという欠点、制約条件もある。しかし、何よりも臨場感が大きく、生きた実物を観察しながら学べるという点が強みである。解説の方法は一般にパンフレット方式と解説板方式の二種類がある。

パンフレット方式

パンフレット方式は探勝路の入口で配布されるパンフレットに、その歩道で観察できる内容が書かれており、路傍にはパンフレットの解説番号に対応する番号標識だけが設けられる方法である。

パンフレットによる解説は写真や図解が活用でき、解説内容も詳細におよび、利用者がそれを家へ持ち帰って復習できるなどの利点がある。また現場の標識は番号杭だけですむから建設費は安く、風致上の支障も少ない。

しかし、パンフレットの印刷代がかかり、その配布方法にも問題がある。アメリカ西部など雨の少ないところでは、探勝路入口に郵便ポストのようなものを設けてその中にパンフレットを入れ、利用者が自由に持って行けるようにしているものを見かける(写真)。この方法は、雨の多い日本に導入することは難しい。探勝路入口に管理事務所や売店でもある立地条件のところでは、この方法が望ましい。パンフレット方式は季節の変化に応じて解説内容を変えたり、あるいは番号標識に対応する植物の名前を、クイズ風にあてたりするゲームなどにも応用することができる。

解説板方式

解説板方式は路傍の解説対象の近くに解説板を設置するもので、日本の自然探勝路はほとんどこの方法によっている。

解説板方式は建設費はかかるが、その後の維持管理費は少なくてすむこと、説明に臨場感があることなどが利点であるが、短所としては季節的なものなど小廻りのきいた解説がしにくいこと、解説文字の字数や図

図 2 歩道からの眺めの効果的な変化

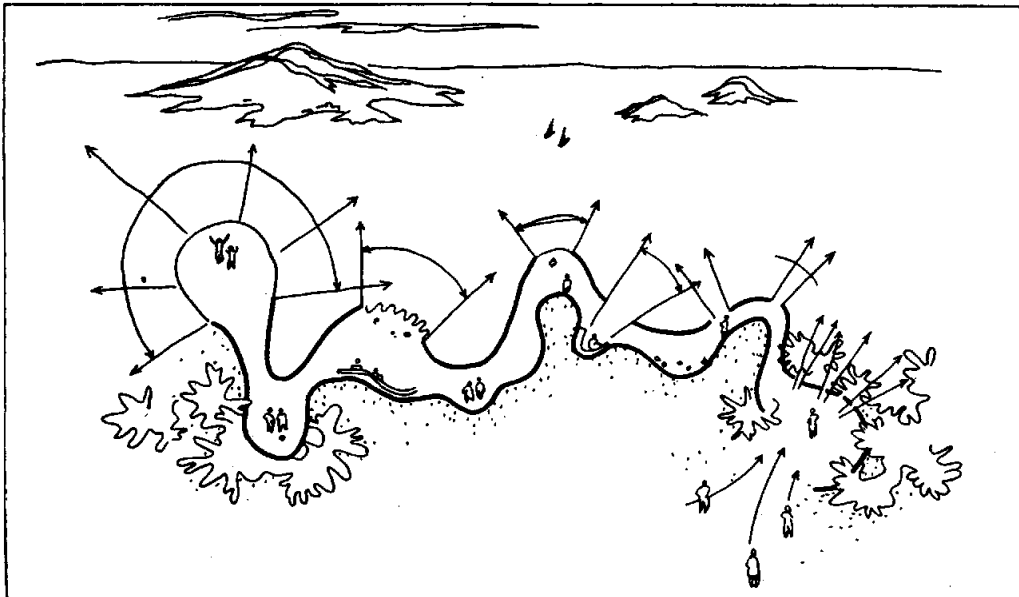


写真 5 入口標式（中央にポスト式パンフレット入）
カリフォルニア国有林

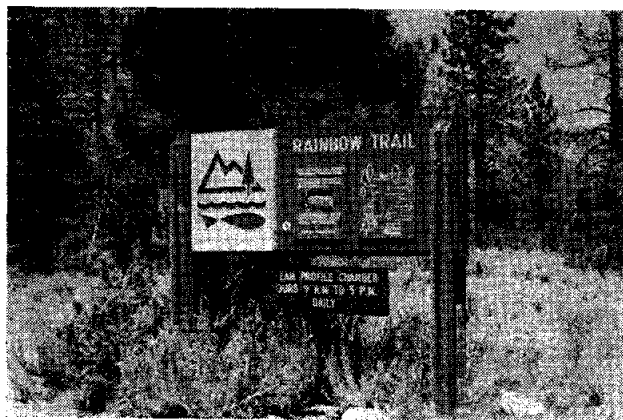


写真 6 太平洋山稜長距離歩道の一部 ジョン・ミューアトレイル ヨセミテ国立公園



解に限度があること、また時としては解説板そのものが風景の邪魔となることなどがあげられる。

解説板のデザインは垂直型（写1）と傾斜型（写4）があるが、いずれも歩行者が立ち停って二〜三mの距離から読み易い程度の大きさが必要である。一般に垂直型の方が大きく、傾斜型の方が小さいが、最小で四〇×六〇cm、最大で一〇〇×二〇〇cmくらいが適当であろう。

文字や図解の表現は木製板の彫り込みにペイントを流し込んだものの、合成樹脂を加工したもの、金属板に化学処理を施したもの、などがあるが、いずれも一長一短がある。木製板は景観になじむが細かい細工に不向きで耐久性は劣り、合成樹脂は鮮明であるが紫外線で変質し、不心得者のいたずらに弱い。金属板は耐候性に優れるが経費が高く、また火山

の硫気孔ちかくでは不向きである。アメリカでは紙に書いたものを額縁に入れられたものも見受けられるが、雨の多い日本の屋外では使うことができない。

解説文はあまり専門的な内容とせず、小・中学生でも理解できるように配慮し、せいぜい二〇〇字以内におさめる。興味をひきつけるようなタイトルをつけ、ときには問題をなげかけるような解説内容とすることも良い。解説板の数は立地条件にもよるが、1kmあたりに十枚弱が適当である。

補助的な解説手段として興味をひきおこさせるようなもの、たとえば適期以外にも花や実を見られるように標本を透明プラスチックに封じこめたものを置いたり、特定の解説対象——たとえば遠い樹幹のキツツキの穴——に照準を固定したファイバーを用意したりするのも良いアイデアである。

自然探勝路の入口には、コース全体の特徴、全長、所要時間、注意事項、略図などを記したやや大きめの標識（写5）を設置すると良い。自然探勝路は、ビジターセンター（総合案内所兼小博物館）や他の自然探勝路と有機的に補完し合うことによって、いっそうその効果が高められるといえる（図1）。

北海道内の実例

北海道内の自然公園には、支笏洞爺国立公園の登別温泉、支笏湖畔（野鳥の森）、大雪山国立公園の高原温泉

阿寒国立公園の硫黄山、阿寒湖畔ポッケ、知床国立公園の知床五湖、野幌森林公園の瑞穂池や大沢などに解説板方式の自然探勝路が設けられている。しかし解説内容が一つのストーリーとしてまとまっていなかったり、解説板の数が少なかったり、あるいは解説板が老朽したりで、必ずしも十分には所期の目的を達していない。

また利用者の方も、中にはかなり熱心な人もいるが、解説板の前をまったく無関心で通りすぎる人も多い。しかし、いままで述べたとおり、自然探勝路は野外レクリエーションと教育的効果を結びつけるには、最も有効な手段の一つであるから、今後さらにこの内容を充実させる努力を重ねる必要がある。なお、この自然探勝路を、野外解説指導者が同行して案内することができれば、その効果はいっそう高まることはいうまでもないが、現状ではなかなか機会に恵まれないのが実情である。

長距離歩道

いまだ十年あまり前、各地の公害被害が深刻な社会問題となり、工業化社会の発展が大きなひずみを露呈してきた時、当時の厚生省（現・環境庁）が発表した「東海自然歩道」の構想は、国民から大きな拍手をもって迎えられた。当時の新聞は「文明に逆行するかのよう自然歩道が建設されることの意味は大きい。自分の足で自然や歴史にふれることは、人間性をとりもどすいい機会になる」と論評した。

東海自然歩道のことについては、その発案者である大井道夫氏が北海道自然保護協会誌第六号（昭和四十四年）に解説を加えているので、ここではふれないが、この構想はすでに実現し、ひきつづき現在では中国自然歩道、九州自然歩道の建設がすすめられている。

この東海自然歩道が発想された背景の一つには、大井氏もふれているように、アメリカのアパラチアン長距離歩道の存在があった。アメリカには国立歩道体系法 National Trails Act という法律があり、十数本の長距離歩道が完成または計画されているという。私は先年、そのうちの

一本である太平洋山稜歩道 Pacific Crest Trail のほんの一部を歩く機会があった（写6）。この太平洋山稜歩道はカナダ国境からメキシコ国境まで、カスケード山脈からシェラネ、バダ山脈を南下し、全長四千kmもあり、その間に七つの国立公園、二十五の国有林の原始地域などを含み、水河地帯、火山、高山植物のお花畑、森林、清流などをぬう山稜上の歩道である。いわゆるバックパッキングとして親しまれるコースで、大部分の人は一、二日の部分的利用であるが、全コースを縦走することも可能で、その場合は約四カ月の日時を要するという。まさに気宇壮大な話である。

このような長距離歩道が現実存在していることを意識しながら北海道の地図を眺めてみると、函館から大沼、遊楽部岳、ニセコ、支笏洞爺地帯から石狩低地帯を横切り、夕張、芦別から大雪山、さらに阿寒、斜里岳をへて知床半島に達するルートが一本と、エリモ岬から日高山脈、大雪山にいたり、さらに天塩岳、函岳をへて宗谷岬に達するルートが浮んでくる。いわば北海道X型長距離歩道の夢物語りである。しかし、これは地形および社会環境の関係から、人里はなれた山稜部だけを通るわけにはいかないが、むしろ山稜部ばかりではなく、場所によって登山家向きの山稜ルートに平行して、山麓農村部を通過したり、国道に沿う緑化歩道の家族コースがあっても良いだろう。ただ車道との平面交差はさけ、あくまでも緑豊かな歩道でなければならない。

現在のところはまた、このような構想はあくまでも夢物語りにすぎないが、いずれかの日には、夢物語りが現実的な射程距離に入ってくることを期待したい。実際には起こり得ないことであるが、函館に住むリスが、その気になれば緑濃い木々の枝から枝へと渡り歩き、一度も地上に降りることなく知床岬や宗谷岬まで行きつくことができる環境が整備されるのを想像することは、心楽しいことである。（野幌森林公園事務所）